

『就実教育実践研究』第9巻 抜刷  
就実教育実践研究センター 2016年3月31日 発行

# 「バリアフリー」に関する大学生の気づきについて

**Survey on University Students' Awareness of the Barrier-Free**

黒住 広 大 ・ 石 山 貴 章

## 「バリアフリー」に関する大学生の気づきについて

黒住広大（埼玉県立大宮北特別支援学校） 石山貴章（教育心理学科）

### Survey on University Students' Awareness of the Barrier-Free

Kodai KUROSUMI (Saitama Prefectural Omiya Kita School for Special Needs Education)

Takaaki ISHIYAMA (Department of Education Psychology)

#### 抄録

本邦では、平成25年6月26日に公布（平成28年4月施行予定）された「障害者差別解消法」における「合理的配慮（Reasonable Accommodation）」の理念を受けて、大学における学びの環境の中の「バリアフリー」に焦点をあてて検討を行った。本研究では、まず私たちの身近な問題から検討していく必要があると考え、大学構内におけるバリアフリーの調査を行い、さらに、学生の問題意識を捉えていくために、バリアフリーに関する基本的質問事項による質問紙調査を実施し、得られたデータをCS（満足度調査, Customer Satisfaction）分析及び自由記述文に対してKH Coder（計量テキスト）分析を援用して結果を提示した。最終的には、“合理的配慮”を意識した学びの環境の改善が必要であることを明らかにした。

キーワード：フィールドワーク バリアフリー CS分析 KH Coder 大学生

In this study the main stress falls on the clear indication of relevancy “reasonable accommodation” and “barrier-free”. This research investigates the barrier-free by fieldwork and questionnaire. Our data are based on fieldwork conducted in Shujitsu University. Questionnaire items tapping feelings about barrier-free and satisfaction were administered to 79 students. The data to be discussed below were collected and the approach employed in this analysis was as follows. 1)fieldwork, 2) questionnaire, 3)CS(customer satisfaction analysis), 4) KH Coder(text mining). The students who were barrier-free reported many places, however, restroom and lecture room was unsatisfactory results. In the same way CS analysis was examined. This finding advances our understanding of how the barrier-free improvement. This approach demonstrates how these consciousness change university students, suggesting why it is important for scholars to investigate the impact of these barrier-free more consider in detail and subject to an analysis. In concluding, We should note that the most important part of this argument is that recognition of the “reasonable accommodation” and improve the enabling educational services and environment. Thus, we

recommend that future research on detailed investigation, consciousness consideration.

Key: Words: Fieldwork Barrier-Free CS Analysis KH Coder University Student

## 1 問題と目的

2003年の「障害者基本計画」において、障害者の生活に関する「脱施設化」が明記され、また、2005年には、障害者自立支援法（2006年に一部施行後、同年全面実施）が施行された。その後、本支援法の問題が浮上したことを受けて、2013年、「障害者総合支援法」に改定され、これまでの障害者の「自立」概念の枠組みについても、再構築がなされながら、「基本的人権を享有する個人としての尊厳」を重要視した障害者個人の生き方の捉えが見直されてきている。2015年6月26日には、「障害者差別解消法」も公布（2016年4月1日施行予定）され、本案の中に“合理的配慮”の提供が含まれることとなり、一人ひとりのニーズに応じた、多様で柔軟な支援のあり方が追究されることとなった。共生社会を実現させるためにも、本法案の施行を一人でも多くの障害のある方が自立していくきっかけとなるよう、障害の有無に関係なく誰もが生活しやすい環境づくりを考えていかななくてはならない。しかし、現段階においては、学校を含む各公共施設や事業所に対して環境整備などの“合理的配慮”が努力義務で留まっていることが問題だと尾上（2013）は指摘しており、佐藤（2014）は学校現場における“合理的配慮”のあり方について検討を行っている。

では、どうして「障害者差別解消法」を踏まえるのか。また、身体に障害のある学生なども含め障害の有無に関係なく、より多くの学生が不自由に感じるものがない快適なキャンパスライフを過ごせるためにどういった手段で明らかにしていくのか。身近な学校内の課題から社会が抱える課題まで幅広く考察していきながら社会と背中合わせでインクルーシブ社会を目指していかななくてはならない。

今後、ますます、この“合理的配慮”を意識した支援のあり方が求められていくことが想定され、障害者の意見や考え方を最大限尊重したサポートの充実が課題となつてこよう。今回の研究では、障害当事者の視点に立つための取り組みとして、まずは、生活環境面に着目することとし、大学における施設設備いわゆるハード面からの検討を試みることにした。大学で学んでいる身体に障害を持った学生などが、不自由なく快適にキャンパスライフを過ごせるよう、校内のバリアフリー化に着目し、改善を必要とする点を明らかにすることで視覚的にも把握しやすく、新設の際、援助する際などで理解できるようにする。そして本研究結果が学生たちの心のバリアフリーに変容していくきっかけとしたい。

よって本研究では、まず私たちの身近な問題から検討していく必要があると考え、大学構内におけるバリアフリーのフィールドワーク調査を行った。さらに、学生の問題意識を捉えていくために、バリアフリーに関する質問紙調査を行い、ここで得られたデータをCS（満足度調査, Customer Satisfaction）分析及びKH Coder（計量テキスト）分析を援用して結果を提示し、障害者が生活しやすい環境のあり方に着目することとした。

## 2 方法と対象

1) 調査期間：2013年5月～12月

2) 対象と方法

(1) 対象と手続き

今回のバリアフリーに関する質問紙調査は、11月28日金曜日の2限目にある「特別支援教育総論」の講義の時間で10分間にわたり、大学1年生の教育心理学科67名、初等教育学科10名、初等教育学科3年生1名、大学院1年生1名の計79名を対象に質問紙調査を実施した。

(2) フィールドワーク調査（バリアフリーに関する実地調査）

就実大学のA館、B館、D館、E館、L館、T館、R館、食堂、体育館、図書館を調査協力者であるT君と2人で調べ、さらに、学生支援課から車いすの貸し出しにご協力いただき、車いすで移動しながらOLYMPUSのカメラで撮影をした。

(3) 質問紙調査（CS分析）

質問紙調査で得られた結果を、CS（満足度調査, Customer Satisfaction）分析を用いて検討を行った。質問内容はバリアフリーに関する基本調査事項（①学年・所属学科・性別、②バリアフリー関連項目認識度、③施設設備の満足度、④自由記述）である。CS分析は、主にマーケティング分野において用いられており、Excel品質管理 Ver.2.0を用いて結果を示した。今回の分析では、大学生の評価について、「あまり満足とは思わない」「満足と思う」「すごく満足と思う」の3段階に対する回答数及び割合を算出しグラフ化した。次いで、各評価項目と総合評価との単相関係数を算出し、7項目の評価を図にプロットした。

(4) Text Mining（自由記述文）

自由記述文で得られた回答をText Mining手法のひとつであるKH Coder（計量テキスト）分析を用いて記述内容を明確化した。Text Miningとは、定性的データを主として、そこからある規則性や法則性を“発掘”していくためのものである。また、複数の属性にまたがるものの中から隠れた法則や規則性（ルール・パターン）を見出し、データ中の雑音を取り除くことによって新たな情報や知識を発見するものである。本研究では、自由記述文で得られたデータについてText Miningを行い、大学のバリアフリーに関する大学生の問題意識についてのKey Wordsを浮上させていった。

計量テキスト分析KH Coder（樋口, 2001）とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法である。樋口（2014）は「内容分析を行う方法」という言葉によって、計量テキスト分析を内容分析の一種または一部として位置づけており、分析方法が信頼性・妥当性を備えねばならないことや、単なるデータの記述ではなく推論を含むと言った、内容分析の考え方を受け継ぐことを明示している。また、この定義では「計量的分析方法を用いてテキスト型データを整理または分析」という言葉によって、量的方法を用いることを明示している。ここで言う量的方法とは、必然的に質的方法を含むものである。量的方法と質的方法とを循環的に用いた結果として、量的分析の結果はデータの「整理」にとどまり、質的な分析・記述が主に報告される場合も



ある。また量的分析の結果が、主たる「分析」の結果として報告される場合もある。計量テキスト分析の方法としての特長は、量的分析と質的分析の組み合わせという点にある。KH Coderは、語の選択にあたり恣意的となり得る「手作業」を排し、多変量解析によってデータ全体を要約・提示することと、コーディングルールを公開するという手順を踏むことによって、操作化における自由と客観性の両立を可能にする（樋口, 2011）。

今回は、調査項目のⅢ（自由記述文）のデータを基に、Text Miningを援用して分析を行った。ここで得られたデータを用いて、“分かち書き処理”（形態素解析：文章の中から意味最小単位を切り出し、切片化したもの）を行い、質的変数を読み込んでいった。さらに、変数のリファイン（“分かち書き処理”したデータの不純物を取り除く）作業を行い、KH Coderを援用して要約次元を導き出していった。

### 3 結果

#### 1) フィールドワーク調査

フィールドワーク調査で得られた結果を一部抜粋して示していく。まず、フィールドワーク調査の最初として、車いすを使用して大学構内を回った。特にトイレに関して不便を感じるが多かった。また、入口が狭く、少し段差などがあるため、一部のトイレは使用することが大変困難であった。また、エレベーターについては、車いすであっても、ボタンを押すこともできる高さにあったため、特に問題



はなかった。扉の開閉時間にもう少しゆとりがあればなおよい。その他としては、目的地まで遠回りしなくてはいけない（授業に遅れる）、ドアで押すよりも、引くのが困難である、混雑時の対応などが挙げられる。少し急なスロープについては、実際はかなり腕力がある。スロープの角度や距離についても、今後検討が必要であろう。一方、車いすを押す側について述べると、①腕力がある②長い時間行うことによる腰への負担、③安全性の確保、④他学生への気遣い、⑤心安らぐ居場所の確保、⑥移動時間の短縮化などが挙げられる。

#### E館バリアフリー（一部掲載）

空間が広々と開放的であり、人がすれ違う際には十分な間隔を確保することが可能となっている。1階のトイレは、他のトイレに比べ開放的で小さい子供・障害者（車いす）専用のスペースが設けられている。



### A館バリアフリー（一部掲載）

A館の玄関の通りにある通路はスロープではなく、わずか2段ながらも段差がある。A館の玄関に置いてある車いすは、小さく折りたたまれていて、玄関の端に置いてある。2階のD館につながる通路は、人がぶつからず、すれ違うだけの横幅もある。

### T館バリアフリー（一部掲載）



T館から外に出る通路は、すべてスロープがついている。すべりにくさという観点からはまだ改善が必要であるが、今後も、必要な場所にスロープを設置していくことが望ましい。



ドアについては少し重いために押したり、引いたりする力を要する。またT館のエレベーターには「車いす優先」の掲示はあるが、点字と音声はなく、空間は広いが通路が狭い。

### L・R館バリアフリー（一部掲載）

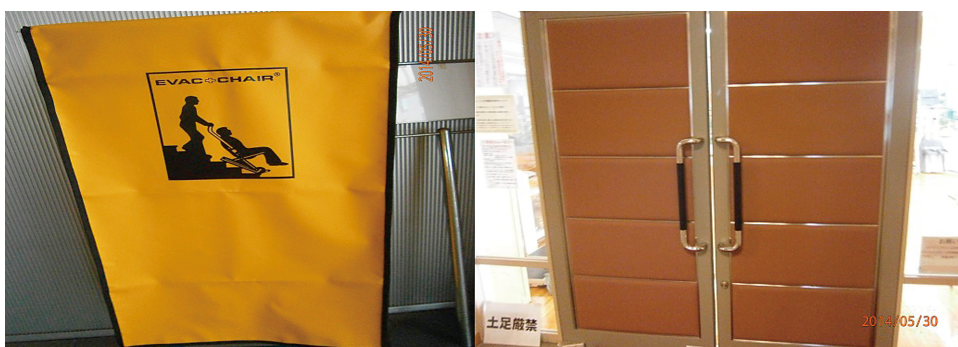


## カフェ（地下食堂）バリアフリー（一部掲載）



広々と開放的で、明るい印象である。また、食堂というだけあり、いつもきれいにされており、通路や食事場所の確保等においても柔軟に対応できるような環境が整えられている。

## 体育館・図書館バリアフリー（一部掲載）



体育館では、エレベーターがない場所に、サポートの器具を備え付けている。また、トレーニング室のドアはクッション性になっており、安全面に関する配慮もなされていた。

## 2) 質問紙調査結果

教育学部1年生の教育心理学科67名、初等教育学科10名、初等教育学科3年生1名、大学院1年生が1名の計79名に調査協力を依頼した。回収率は100%である。

### (1) バリアフリー関連項目に関する認知度について

「ユニバーサルデザイン」については全員が知っていた。「インクルージョン」も71%と高く、「障害者差別解消法」14%、「合理的配慮」29%という結果であった。

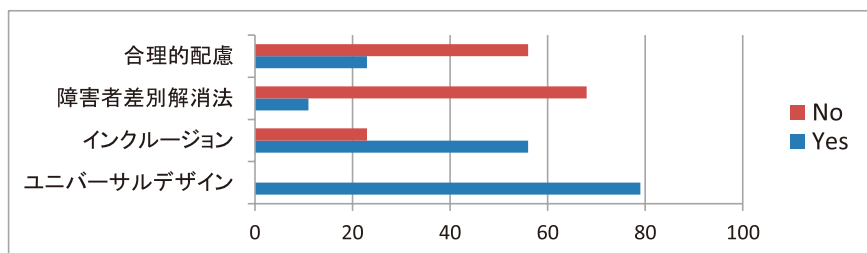


Fig.1 バリアフリー基本調査結果



## (2) バリアフリーに関する意識調査について

さらに、バリアフリーに関する意識調査を詳細に把握していくため、得られたデータを基に、主に、マーケティング分野で用いられているCS（Customer Satisfaction）分析〈Excel品質管理 Ver.2.0〉を援用して分析をした。ここでは、単相関係数を“重要度”とし、「満足」の割合を“満足度”としている。なお、グラフ上の横線と縦線は、「満足」の割合（満足度）と単相関係数（重要度）の偏差値となっている。改善度については、その値が大きいほど、その項目に関する手立てが不十分であり、改善を図らなくてはならないという教員の意識を示している。値が負（マイナス）の場合は、改善しなくても、現在のままで満足な支援が実践できていることを示している。

分析の結果から、満足度偏差値が低く、重要度偏差値が高い場所は「トイレ」であった。次に「エレベーター及びスロープ」であり、「食堂」、「コンビニエンスストア」が続く。満足度と重要度ともに平均値より低いものとしては「講義用教室」、「掲示物」がある。改善度を見るかぎり普段よく利用する項目ほど高い数値となっていることが分かる。

Table.1 機能・サービス改善グラフ

項目（場所）	満足度偏差値	重要度偏差値
講義用教室	40.74	46.9438
食堂	54.39	51.5080
コンビニエンスストア	53.25	50.4449
トイレ	32.77	63.4253
エレベーター及びスロープ	57.80	56.3221
自動販売機	64.63	52.8060
掲示物	46.42	28.5499
平均	50.00	50.0000

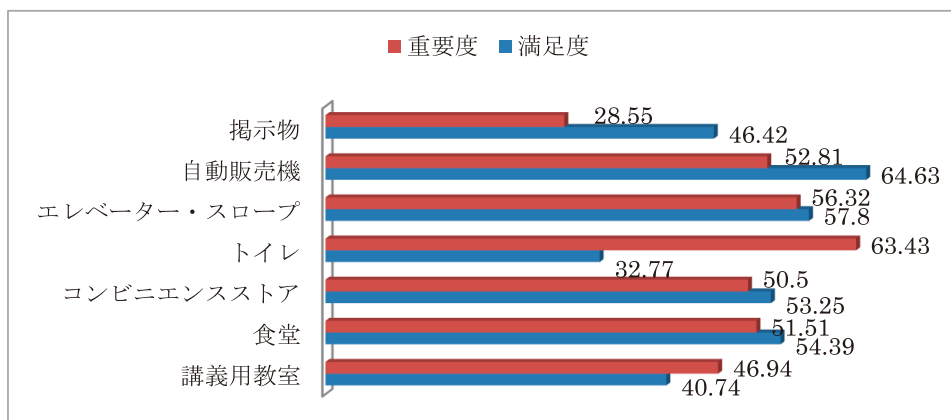


Fig.2 重要度・満足度 偏差値比較図

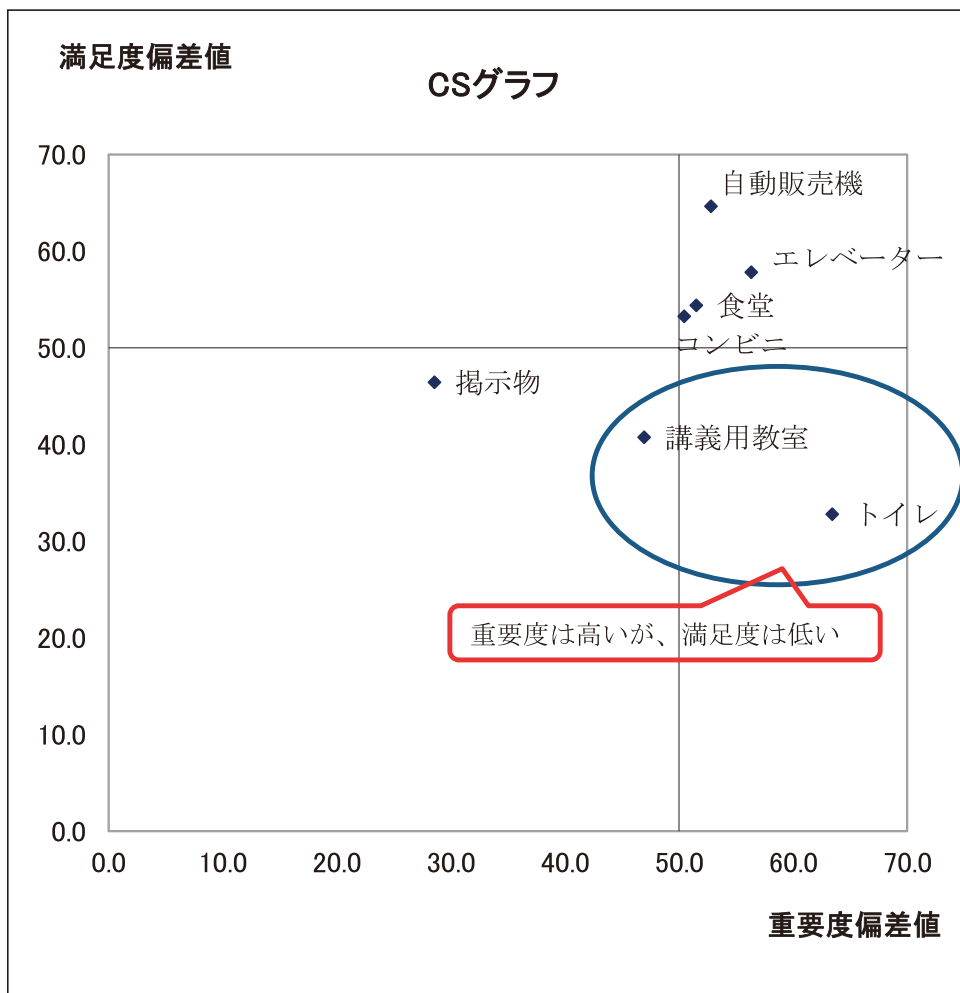


Fig.3 バリアフリー満足度CSグラフ

### (3) Text Mining (自由記述文)

自由記述文について、KH Coderを援用してText Miningを行い、大学生の問題意識について傾向を把握することを試みた。

#### 1) 頻出語

頻出語150語については図3の通りである。「人」「エレベーター」「スロープ」「トイレ」が一番多く、次いで、「狭い」「手すり」「バリアフリー」「机」などとなっており、他者の配慮や物理的環境の整備に問題意識が高く見られている。その他1回のみの出現語としては、きれい、すべて、もう少し、ガタガタ、ロッカー、意味、移動、一番、雨、遠回り、楽、割合、滑る、間隔、危険、降りる、視覚、時計、時間、授業、出入口、女子、松葉杖、洗面台、階段、通路、転倒、電気、道幅、配慮、買う、不自由、物、役立つ、遊ぶ、洋式、用意、利点、利用、立つ、列、廊下、和式などが出現していた。

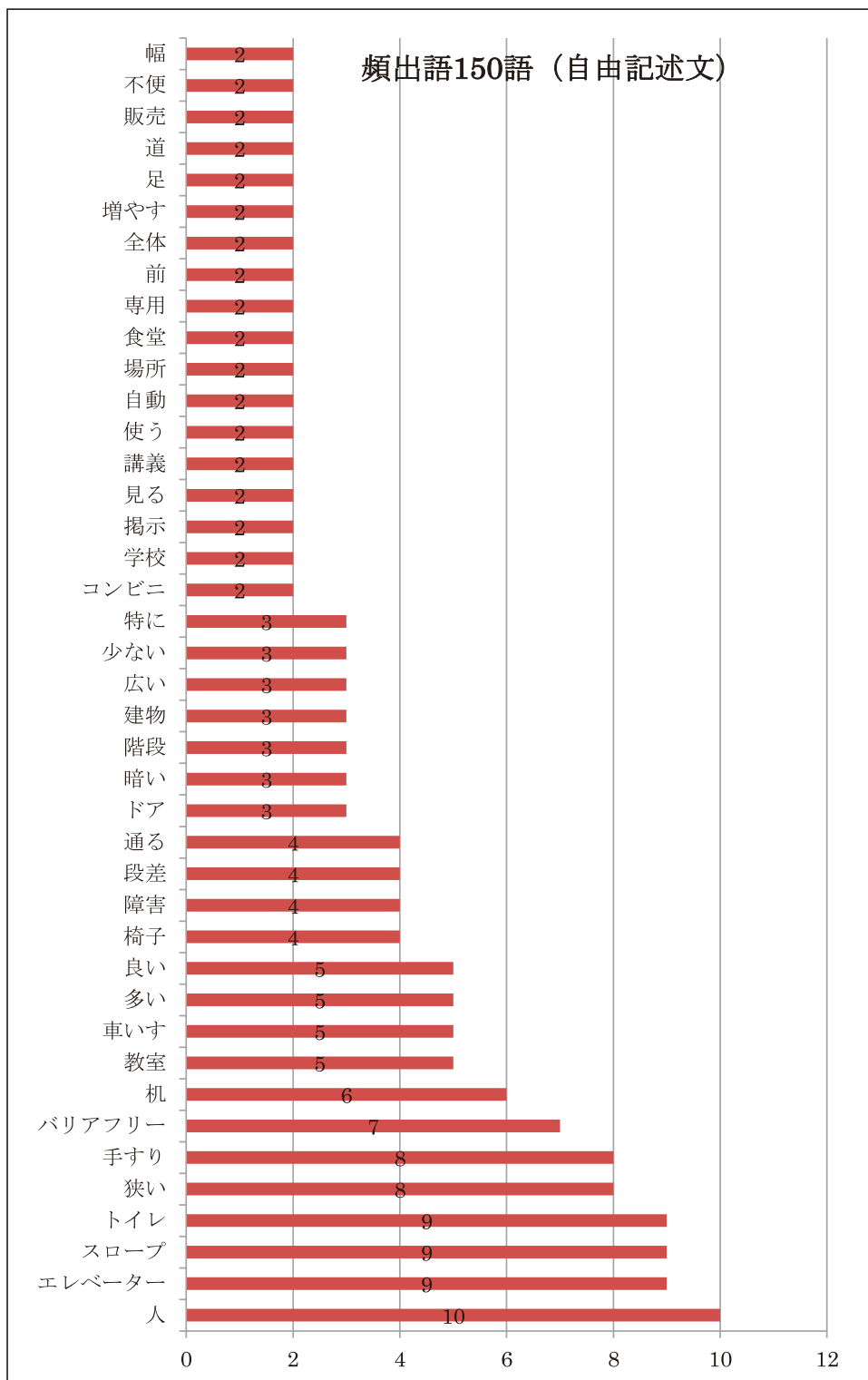


Fig.4 頻出語150語（自由記述文）

## 2) クラスター分析

自由記述文における頻出語の出現パターンを明らかにしていくため、クラスター分析を行った。この結果から、6クラスターが見出され、自由記述文の中で、それぞれの語がいかに用いられたかのデータ視覚化を行った。CL1は「椅子」「机」「前」「通る」「段差」「多い」「自動」「販売」、CL2は「全体」「学校」「道」「広い」「車いす」「人」、CL3は「トイレ」「少ない」「足」「障害」「専用」、CL4は「建物」「暗い」「エレベーター」「不便」「特に」、CL5は「狭い」「幅」「バリアフリー」「教室」「ドア」「講義」、CL6は「コンビニ」「食堂」「見る」「場所」「良い」「手すり」「階段」「掲示」「増やす」「スロープ」「使う」となっていた。

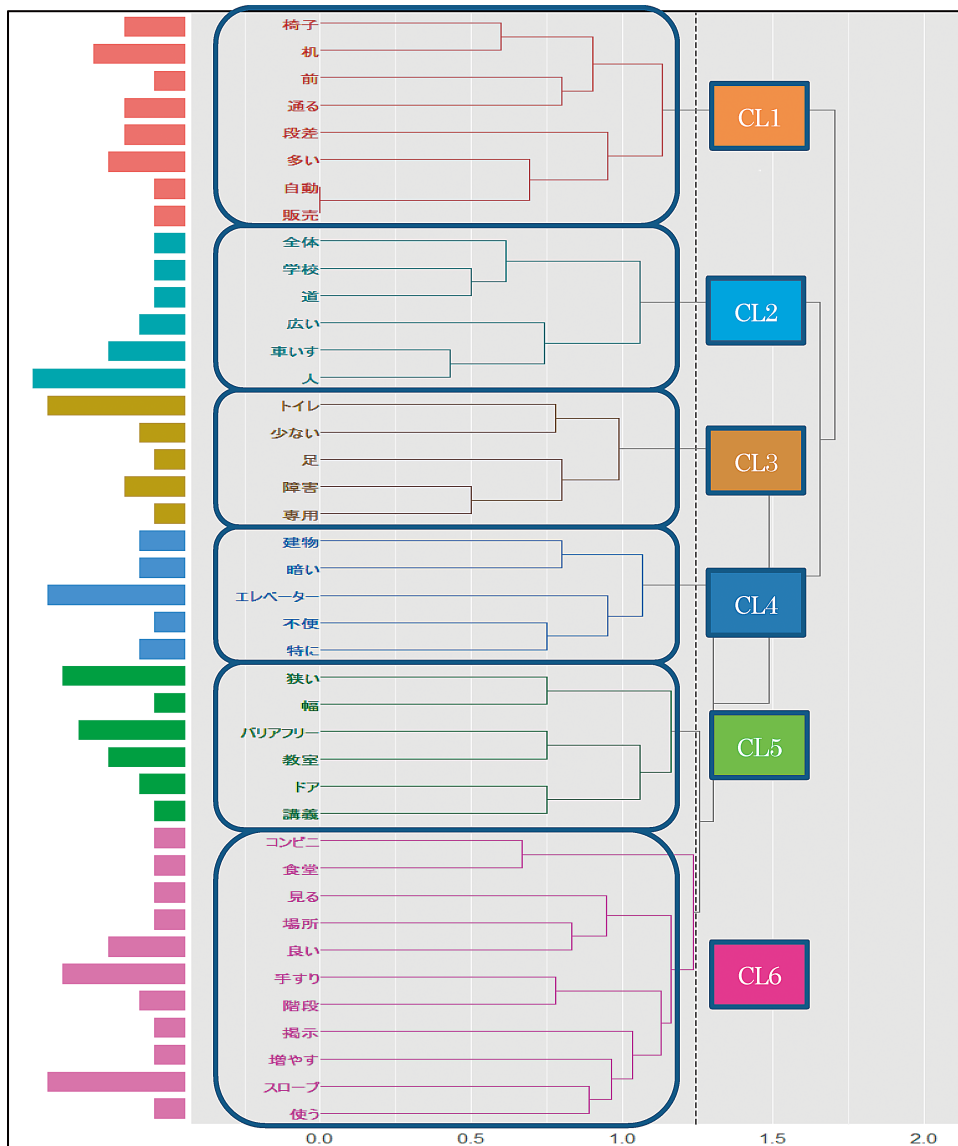


Fig.5 クラスター分析結果（自由記述文）



### 3) 共起ネットワーク

さらに、自由記述文の出現語パターン、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークを描くことにより、それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているのかを確認した。ちなみに、強い共起関係ほど太い線で示されており（共起の程度と線〈edge〉）、なおかつ、出現語の多い語ほど、大きな円で描画（出現数と語〈node〉）されている。結果図を確認すると、車いすを中心として、場所や物、建物の構造、大学関連施設（コンビニ、食堂）、人との関係性などの広い領域にわたって関連性が見出されている。さらに、トイレに関する課題、階段と手すり、講義用教室についても大学生の問題意識のつながりが確認された。

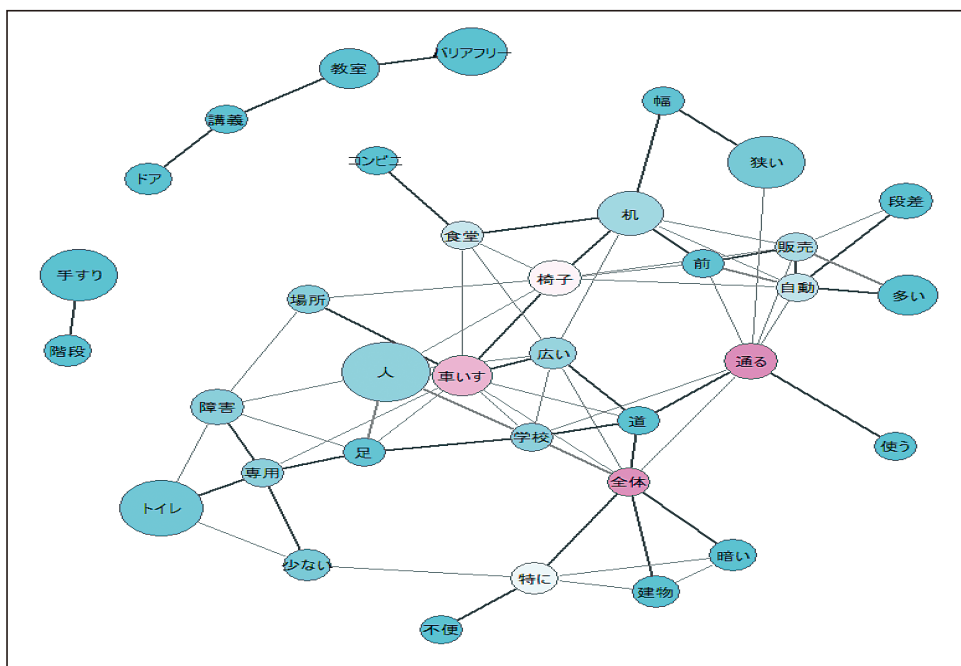


Fig.6 共起ネットワーク結果図

### 4 考察

本研究から明らかになったこととしては、まず、バリアフリーに関する認識では、「ユニバーサルデザイン」を知っている人の割合が100%、「インクルージョン」は71%、「障害者差別解消法」は14%、「合理的配慮」は29%と半数を下回っていた。一方、フィールドワーク調査においては、実際に車いすを利用することにより見出された課題や問題点があった。つまり、普段から自分自身が不便だと感じない限りは、あまり気になることもなければ気付くこともできなかったということになる。気になることから発見や気付きも生まれるが、気にならなければ話は別となる。安全で過ごしやすい場が確保されることは、バリアフリーの大前提ともなってくる。

バリアフリーにはハード面とソフト面なものがあるが、ハード面にはここでいう環境の整備があり、ソフト面には自由記述文で示されていた学生の意識の変容もある。両面が合わさってこそ、障害の有無に関わらない、快適、安心に過ごせる場となってくる。学生や教職員がアクションを起こしていくことで、大学全体としてバリアフリーが意識された生活へと変容していくのではないかと考える。

また、CS分析及びText Miningにおいては、評価項目改善度の表やグラフに加えアンケートの意見にも書かれてある通り、「トイレ」の改善が一番に指摘されている。「講義用教室」においても、広さや幅、扉などで課題が見出された。また、「エレベーター及びスロープ」でも、自由記述文にある。「エレベーターがない館がある」という意見が多く見られた。それを象徴するのが「A館やB館などエレベーターがないため、遠回りしなくてはならないので不便である」という意見である。

特に今後、E館から移動できない場合は早急に対応する必要がある。またスロープもない館があるため、随時、増やしてほしいという意見があった。ここまでは「エレベーター及びスロープ」の不足している点が挙げられてきたが、「トイレ」とは異なり、利点も多く挙げられている。例えば「エレベーターとスロープともにある館の方が多い」という意見や「E401の教室の入り口に段差を解消するものがつけられているのに気づき、小さな配慮が良かった」という普段から意識してないと見落とししやすい小さな配慮という視点での意見があった。E401の入り口にある段差を解消する小さな配慮を【段差】に挙げられているD館やA館の間、自動販売機の段差がある個所に応用することで段差を少なくしたり無くしたりすることができるのではないかと考える。

他にも「自動販売機」は改善度が一番低く、グラフでは平均値偏差値が一番高い。だが意見として【幅の狭さ】の項目に「自動販売機の前に机や椅子が多く通りにくい」というものもある。D館の前にいくつもある自動販売機は段差もあり机なども多い。「講義用教室」は改善度がトイレに次いで2番目に高く、【幅の狭さ】の意見として「机同士の幅が狭い」、「教室などの間隔が狭いため通りづらい」、「講義室のドア（出入口）が狭い」、「ドアを引き戸にする」などが指摘されていた。だが利点としても「車いすの人でも授業が受けられるように特定の場所に椅子がないことは良い」という意見もあり、どの講義用教室にもそれが反映されることが望ましい。今回は大学1年生を主に対象として行ったバリアフリー調査だったが、大変多くの事が課題として挙がった。今後は、本調査で明らかとなった課題を一つひとつ解消していくために具体的なアクションを起こすことが必要である。

## 5 まとめ

本研究では、「障害者差別解消法」の考え方に基づいて障害者が生活しやすい環境のあり方に着目し、大学におけるバリアフリーの検討を行ってきた。まず、フィールドワーク調査をして一番強く感じたことは、落ち着いていられる居場所が少ないということだ。それは周りの目だけでなく、単に施設の環境整備不足から感じたものもある。CS分析の自

由記述文にも挙げられていたが、椅子のない机を用意したり、エレベーターやスロープがない場所は早急に対応したりするなど、「居場所」の確保は快適な生活を保障するうえで欠かせない。また、移動する際に時間と体力を多く要することから、環境整備に加えてエレベーターの優先性や移動時間の確保なども必要である。他にも「トイレ」や「講義用教室」については幅を広げたり、ドアは引き戸にしたり等の「活用性」「便利性」を追求していくことが求められよう。

障害のある学生の言葉に耳を傾け、それを実行していくことは、その人のためでもあり、今後同じ境遇にある学生へのためにもなるのである。率先してバリアフリーを進めていくことで、学生の心のバリアフリーも育まれていく。そしてその学生が社会に出て育んだことを実行していくことで、バリアフリーが浸透したインクルーシブ社会が根付いていくと考える。特に、心のバリアフリーはお互いが接点を持つことで育まれていく。相手の立場に立って物事を考えるためには、相手のことを知る機会がなくては成り立たない。

今後も現代社会がよくなるという保障はどこにもない。ただ一人ひとりが社会をよくしていこうと行動し、問題意識を持っていくことが共生社会の大きな一歩となるのではないだろうか。

## 【資料】質問紙調査票

バリアフリーに関する満足度調査票				
私は、卒業研究によって今、本大学で学んでいる身体に障害を持った学生などが不自由を感じない快適なキャンパスライフを送れるために努めています。障害の有無に関係なく、より多くの学生が快適なキャンパスライフを過ごせるための基礎調査としています。本調査に関して、ご協力をよろしくお願いいたします。				
<b>I. 調査基礎項目（該当する項目内容を○で囲んでください）</b>				
Item No	基礎データ質問項目	項目内容		
1	所属	学年（ 1 、 2 、 3 、 4 ） 学科（ 初等教育 、 教育心理 、 幼児教育 ）		
2	性別	1 男性      2 女性		
<b>II. 評価項目：バリアフリーに関連する各項目の言葉を知っているか YES が NO でお答え下さい。（該当する欄に○を入れて下さい）</b>				
Item No	評価項目	YES	NO	
3	「ユニバーサルデザイン」という言葉を知っていますか			
4	「インクルージョン」という言葉を知っていますか			
5	「障害者差別解消法」を知っていますか			
6	「合理的配慮」という言葉を知っていますか			
<b>III. 評価項目：本大学での学生生活を振り返りながら、各項目における施設設備の満足度についてお答え下さい。（該当する欄に○を入れて下さい） ※ 1 あまり満足とは思わない 2 満足と思う 3 すごく満足と思う</b>				
Item No	評価項目	1	2	3
7	講義用教室			
8	食堂			
9	コンビニエンスストア			
10	トイレ			
11	エレベーター及びスロープ			
12	自動販売機			
13	掲示物			
14	総合評価（大学の施設をトータル的に評価）			
<b>IV. 本大学でのバリアフリーについて（具体的に何があれば記入ください）</b>				
※ 本データは、研究以外の目的で使用することはありません。ご協力、誠にありがとうございました。				

## 【文献】

- 崔 栄繁 (2013)：障害者権利条約と諸外国の障害者差別禁止法, 月間福祉, 1-3.
- 東 俊裕 (2013)：障害者差別解消法の意義と課題, 月刊福祉, 13-19.
- 樋口耕一 (2014)「社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して」,  
ナカニシヤ出版.
- 尾上浩二 (2013)：障害者差別解消法への期待－インクルーシブ社会に向けて, 月刊福祉, 21-24.
- 太田修平 (2013)：障害者差別解消法への期待, 月刊福祉, 26-27.
- 中島秀夫 (2013)：地域で『暮らす』－相談支援のあり方と共生社会, 月刊福祉, 30-32.
- 朝日雅也 (2013)：障害者が働くうえでの差別の解消について－障害者差別解消法公布と  
障害者雇用促進法改正を踏まえて, 月刊福祉, 36.
- 小林 博 (2013)：社会福祉施設からみた障害者差別解消法」, 月刊福祉, 37-40.
- 野沢和弘 (2013)：障害者差別解消法を活かすために, 月刊福祉, 41-45.
- 竹内小代美 (2010)：「誰もが生まれてよかったと思える教育」, 幻冬舎ルネッサンス, 30-37.
- 厚生労働省 (2013)：「障害者雇用対策」 [www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/shougaisha.html](http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/shougaisha.html)
- 厚生労働省 (2013)：「労働経済白書」, 新高速印刷株式会社.
- 日本発達障害福祉連盟 (2013)：「発達障害白書」, 明石書店.
- 西村修一 (2011)：ICFと合理的配慮との関連性：個人のニーズの実質的視点から合理的  
配慮を捉える方法的知見, 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 34, 137-144.
- 山本智子 (2015)：知的障がいがある人への支援における「当事者性」を問う－障害者支  
援施設（知的）における利用者と職員の語りから, その多様性を探る－」, 臨床心理学研  
究, 52(2), 25-39.